第40回中国五大学学生競技大会を終えて

学校教育学部学生　宮本英征

「広大健児ここにあり！」

昨年7月と11月に当地広島で行われた，第40回中国五大学学生競技大会も，見事我が広島大学の総合優勝で幕を閉じた。

夏季大会は総合2位の島根大学に10点も差をつけるほどの大勝であったが，冬季大会では惜しくも宿敵島大にトップの座を奪われてしまった。このようにして，夏季・冬季両大会の連覇はならなかったものの，猛然と追ってくる他四大学をものともせず，広島大学は実に4年ぶりの総合優勝を果たした。

そもそも，総合優勝旗の管理者であり，かつ優勝旗の故郷ともいうべきこの広島大学がここ数年，2，3位に甘んじていたことに加えて，地元開催ということも手伝って広大健児の意気は最高潮に達していた。

そのためか夏季・冬季両大会を通じて，各競技の実力が遺憾なく発揮されたようで，往年の宿敵を敗る，あるいは実力を誇示し連続優勝を果たす，といったドラマが数多く生み出された。

勝利の美酒に酔った我々学生の感激はいうまでもないが，田中学長を始め教職員の方々も大変お喜びになられたのを見て，わずかであるが，この広島大学が活気づいた気がした。

スポーツというものは，プレーする当人が自分の楽しみのため，自分を高めるため，いわゆる「自己実現」のために行われるものである。勝利の喜び，敗北の悲しみ。目標への絶え間なき探究心等々。どれをとってもスポーツの醍醐味である。が，それとともにスポーツを観る者に対しても感激を与え得るものであることも忘れてはならない。

今回の五大学大会においても，『感激』が我々一部の者だけのものではなく，広島大学全体のものであったら，いかにすばらしいことだろう。オリンピック大会で，無関心であったり，日本を応援しない日本人はほとんどいない。皆自分の何かを日本の選手団に託して応援しているようである。この五大学大会も，いつの日かこんな大会になることはできないものだろうか。

身近なところから少しずつ変えていくことが必要である。40年の歴史が，単に「古い」というものだけに終わってしまっているのならば，刷新しなくてはならない。運営側の情

宜力の問題，そして周囲の人々の関心。少しずつ努力を重ねて変えていかねばならないものである。

昨今の，広島大学のスポーツ活動を見ると必ずしも低迷している訳ではない。体育会陸上部出身で現在総合科学部の大学院に在籍されている鶴崎選手のニューヨークマラソンでの大健闘。そして，アメリカンフットボール部の大学地区対抗戦での優勝。全国レベルとまではいかずとも，西日本あるいは中四国での広島大学の健闘は枚挙にいとまがない。全国あるいは世界へ飛び立とうとする萌芽は，この広島大学にも確実に備わっていると思う。

かつて，京都大学がアメフトにおいて日本の王者として君臨したごとく，広島大学にもぜひより高くはばたいてほしい。我々広大スポーツマンの合言葉は『感激を君に，喜びを僕に』である。

まことに拙文ではありますが，最後に今大会関係者の方々への感謝の念と，今後の広島大学の発展を願いまして，実行委員長挨拶とさせていただきます。

念願達成!! 五大学初優勝

――ハンドボール部――

理学部学生　関藤孝之

「広大は中国五大学には優勝できない。」というジンクスができたのはいつからだろうか。確かに僕が一年の時は伏兵島大に優勝をさらわれ，二年の時には山大に負けてしまった。中四国では一部リーグで安定した力を保ち，優勝もしていたが，なぜか中国五大学では勝てなかった。

しかし，広大は今年，そのジンクスを見事打ち破ることができた。そう，広大の五大学初優勝達成である。

今回の大会を振り返ってみると，対山大戦がすべてであったと言ってよいと思う。山大は中四国の一部リーグで毎回広大と優勝を争っているチームである。その他の大学は二部・三部で楽勝といえば楽勝であった。山大との試合は大変な接戦で，今思えばどちらが勝ってもおかしくない試合であった。この試合を広大はなんとかモノにし，そのまま全勝優勝した。あの山大との接戦で勝てたのは地元の利が大きかったと思う。実力は五分であるから，このようなほんのちょっとしたことが勝因になったのではないだろうか。来年からまた他校に遠征するが，今度は他校・地元関係なく勝てるようにがんばりたいと思う。